

社会科学方法論としての弁証法の定式化

表象および存在形態と本質 (下)

板 木 雅 彦

目 次

はじめに

第1節 表象とその純化

第2節 純化された表象 要素と連関性 (第14巻4号, 2002年3月)

第3節 存在形態と本質

1. 本質をとらえる

2. 存在形態

3. 一般的存在形態の二つの型 単層構造と多層構造

4. 一般的存在形態と仮象 (第15巻1号, 2002年6月)

5. 本質

6. 事物の生成 素材から要素へ

7. 矛盾

8. 三つの連関性 一様性, 多様性, 統一性 (以上, 本号)

5. 本質

ヘーゲルが言うように、事物の表象を概念に変えること　これが科学の任務であった。あるいはこれを、事物の諸現象のなかからその本質を抽出することとも言い換えることができる。わたしたちはこれまで、事物の表象の分析を通じてそのもっとも基本的な三つの存在形態を明らかにしてきた。そこで次に、事物の現象形態と本質の関係　言い換えれば、事物の概念をめぐる基本的なカテゴリー間の関係について検討しておこう。わたしたちはいよいよ、事物の本質とは何かという問題に迫ることになる。

事物の本質をつかみ、この本質がなぜ、そしてどのようにしてさまざまな諸現象として現われ

でなければならないかを認識するために、わたしたちは、**概念**という思考の形式を用いる。ヘーゲルは、概念について次のように指摘している。

「概念そのものは、次の三つのモメントを含んでいる。(1) 普遍、・・・(2) 特殊、・・・(3) 個・・・。」(ヘーゲル [1817] (下) 127 ページ)

つまり、事物の本質とその個別的形態、特殊的形態、そして普遍的(あるいは一般的)形態を統一的につかむものが、事物の概念である。しかし、ただそのように断言するだけでは概念について何も明らかにしたことになる。この場合にもわたしたちは、まず概念の表象から分析をスタートさせることにしよう。

わたしたちが事物を概念的に把握しようとするとき最初に目に飛び込んでくるものは、何をにおいても事物のさまざまな**現象**である。

つまり、そのときどきの偶然に左右されながら、個々の事物としてわたしたちの目の前に現われ得るものが事物の現象である。そして現象は、互いに連結しあうことによって、さらに複雑な様相を示すことになる。このような、わたしたちの目に見えるがままの概念の純化された表象を定式化してみよう。

概念の表象 = [連関性 現象]

ここからわたしたちは、概念の三つの存在形態に関する定式を展開することができる。

個別的な存在形態 = [個別的現象 潜在的連関性]

特殊的存在形態 = [顕在化する特殊的連関性 展開する諸現象]

一般的存在形態 = [顕在化した一般的連関性 個別的現象]

{ 展開した諸現象 潜在的連関性 }

ここで、顕在化された一般的連関性を体現した個別的現象を「一般的現象」とおき、これに連関性を奪われて量的側面を担うことになった個別的現象を「展開した諸現象」とおくと、わたしたちは、次のような概念の一般的存在形態の定式を得ることができる。

概念の一般的存在形態 = [一般的現象 展開した諸現象]

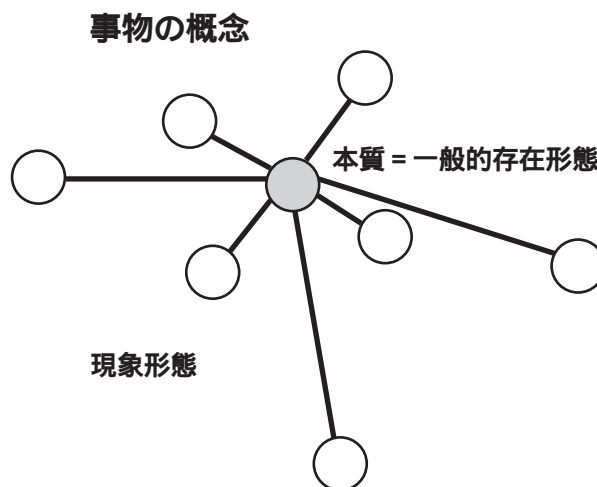
この最後に現われた一般的形態の主要モメント「一般的現象」は、個別的な現象でありな

がら、そのままの姿で諸現象のもっとも一般的な連関性を体現するものである。では、無数に存在する事物の存在形態の中で、いったいどれがこのような性質をもった一般的現象にあたるのだろうか。すでにわたしたちは、これら事物の存在形態を三つの基本形態に整理しているから、この中でもっとも一般的に諸現象間の連関性を体現しているものを探しだせばいいことになる。そして、容易にわかるように、事物の一般的存在形態がこれにあたるわけである。

さまざまな姿をとりながら現象する事物を、もっとも単純に、かつ最大限の量的展開を実現しながら統一的に表現することのできる一般的存在形態こそ、事物の本質そのものである。

この一般的存在形態を除くその他すべての形態は、右項の「展開した個別的現象」にまとめられている。これら諸現象は、一般的存在形態によってしっかりと統括され整理されることによってはじめて「形態」という規定を受けることになる。したがって、わたしたちは、このような現象を**現象形態**と呼ぶことにしよう。ここから、上の概念の一般的存在形態を表わす定式は、単純化して次のように書き換えることができる。

概念 = [本質 現象形態]



わたしたちは、しばしば事物の本質というものを、諸現象と切り離された何か特別の存在であるかのように考えがちである。泥臭い具体性にまみれた諸現象とは違って、崇高な抽象性に彩られた何かつかみがたい、あるいは近寄りがたいものをもっていることが、事物の本質の「本質」たるゆえんであるかのようなとらえ方である。しかし、そのような観念的な「本質」の理解は、金輪際捨て去らなければならない。

本質とは、たしかに事物を事物たらしめている連関性であるということが出来る。しかし、

その連関性は空中に浮遊する幻のようなものであってはならない。まず第一に、互いに連関するべき要素をもっとも大規模に展開し、そして第二に、本来手で触れることさえできない連関性を物質化し、手で触れることのできるものに変える一般的要素を備えたものこれが具体的な本質の姿である。そして、そのような本質は、諸現象の一つ、存在の一般的現象形態に体现されているのである。

以上でわたしたちは、とりえず事物の概念を部分的につかむことができたということができる。これがなぜ「部分的」かということ、わたしたちがいままで展開してきたものは、あくまで事物の存在形態にすぎないからである。事物の概念の全体像をつかむためには、まだまだこれから事物の機能形態や運動形態など、さまざまな現象形態を明らかにする課題が残されている。しかし、そこに進む前にまず、要素のカテゴリーについてよりいっそう考察を深めておかなければならない。

6. 事物の生成 素材から要素へ

わたしたちはこれまで、事物の本質とその存在形態を明らかにしてきたわけだが、ここで少し事物と要素の区別について考えてみよう。たしかに、要素も広い意味では「事物」の一つに違いない。しかし事物は、一つの全体性を持ち、当面それ自体で完結したものととらえられるのに対して、要素を特徴づけるものは、部分性である。

けっしてそれ自体完結したものであってはならず、その全体性、完結性は、すべて事物の側に譲り渡されているわけである。この両者の区別と関連をどうとらえるかという問題は、事物がそれ自体で完結しているのに、どうして要素は互いに連結しあって連関性を生み出すのかを問うことである。そしてこれを問うことは、要素の連結の秘密、事物の存在理由そのものを問うことでもある。

実際、わたしたちが研究を遂行していくうえで、「要素」というカテゴリーほど重要なものはない。

研究対象に関する数限りない表象を前にして、いったい何を要素としてつかみ取り、そこから何を連関性として抽出すればよいのだろうか 研究者なら誰でも一度は遭遇せざるを得ない根本的な問いかけである。もちろんわたしたちはここで、あらゆる研究に妥当する分析の万能薬を提示しようというのではない。そのようなことはもとよりできるはずもないが、ただ何か、要素をつかみ取るための糸口のようなものを提起することはできないだろうか。

わたしたちは、事物を分析してそれを要素に還元した。では、要素がもうそれ以上分析することのできない最小の単位かということ、そうではない。要素はさらに、素材にまで分解することができる。

事物はかならず要素に分解され、要素はかならず連結して事物を構成する。この意味で両者は、必然的な関係にある。したがって、事物がその質を維持するための最小単位は、あくまで要素である。

ところが、要素がさらに素材にまで分解されてしまうと、もはや事物本来の質が失われてしまい、このような素材をいくら連結してもけっして要素や事物を再生させることができなくなる。逆にまた、素材の側から言っても、素材はかならずしも当該の事物にまで連結していく必然性をもたない。同じ素材が他の事物を形成するための素材となる可能性も十分あるからである。その意味で、その事物の素材として使用されているということは、当該の素材自身にとっては、まったくの偶然事にすぎない。ここに要素と素材の根本的な違いがある。

このことを「賃労働」と「労働」を例にとって説明してみよう。マルクスは『資本論』第1巻第5章第1節「労働過程」で、次のように述べている。

「労働は、まず第一に人間と自然とのあいだの一過程である。この過程で人間は自分と自然との物質代謝を自分自身の行為によって媒介し、規制し、制御するのである。人間は、自然素材に対して彼自身一つの自然力として相対する。彼は、自然素材を、彼自身の生活のために使用されうる形態で獲得するために、彼の肉体に備わる自然力、腕や脚、頭や手を動かす。人間は、この運動によって自分の外の自然に働きかけてそれを変化させ、そうすることによって同時に自分自身の自然〔天性〕を変化させる。」（マルクス〔1867〕s. 192, 234ページ）

「これまでにわれわれがその単純な抽象的な諸契機について述べてきたような労働過程は、使用価値をつくるための合目的活動であり、人間の欲望を満足させるための自然的なものの取得であり、人間と自然とのあいだの物質代謝の一般的な条件であり、人間生活の永久的な自然条件であり、したがって、この生活のどの形態にもかわりなく、むしろ人間生活のあらゆる社会形態に等しく共通なものである。」（マルクス〔1867〕s. 198, 241ページ）

ここでいう「あらゆる社会形態に等しく共通な」労働が、賃労働の素材である。賃労働は可変資本として、不変資本とともに資本を構成する。しかし、労働一般はそうではない。労働そのものをいくら連結しても、そこから資本が生まれるとは限らない。古代奴隷制のもとのピラミッドがそこから生まれるかもしれないし、中世封建制のもとの農村共同体がそこから生まれるかもしれないからである。

この賃労働と労働の例に端的に示されているように、要素は歴史的にのみ存在するのに対

して、素材は歴史普遍的、あるいは歴史貫通的に存在する。

つまり、素材は、ある特殊歴史的諸条件が成立してはじめて要素になることができる。素材にとってはあくまでも偶然的なその特殊歴史的諸条件のもとでのみ、素材は必然的に要素になることができる。このことを、素材はある歴史的規定を受けて要素になると言い換えてもよからう。

しかし、次のように問うことは不可能だろうか。事物は、つねに歴史的にのみ存在することができる。つまり、「事物が存在する」というのは、かならず「ある時点において存在する」のであって、時間を越えた存在というものはありえないからである。したがって、素材であるからといって、そのまま剥き出しの超歴史的な姿でわたしたちの目の前に現われることは決してないのではなからうか。これはまったく正しい問題提起である。歴史的には、素材はかならず要素として存在しなければならない。労働一般といっても、そのような超歴史的な労働が人類の歴史にいまだかつて存在したことはない。労働は、つねに古代奴隷労働であったり、中世農奴労働であったり、近代賃労働であったりしてきたわけであって、このことは未来永劫変わりようがない。

したがって、わたしたちが要素から素材を分離することができるのは、現実の歴史過程においてではなく、わたしたちの認識過程においてのみであるということが出来る。これで、素材がある特定の歴史的物事を構成する必然性をもたないことがわかったわけだが、しかし他方で、素材は、事物一般を構成する歴史普遍的な連結力を備えていると考えることができる。議論を具体的にするために、再び労働を例にとろう。

労働は、資本のもとで賃労働となることによってはじめて連結されるのではない。たしかに、協業という労働形態は資本主義を特徴づけるものである。協業とは、「同じ生産過程で、または同じではないが関連のあるいくつかの生産過程で、多くの人々が計画的に一緒に協力して労働するという労働の形態」(マルクス [1867] s. 344, 427ページ)をいう。しかし、人間の協働形態は、協業だけに限られるわけではない。これ以外にも社会的分業という協働形態がある。これは、「多種多様な、属や種や科や亜種や変種を異にする有用労働の総体」(マルクス [1867] s. 56, 57ページ)が、一作業場を越えて広範囲に結び付いた形態である。協業も社会的分業も、ともに人類の歴史とともに古い。より正確に言えば、人類は社会的動物として、いつの時代にも協業や社会的分業を組織してきたとすることができる。そして、社会的協働形態をより高度なものにすることを通じて生産力を向上させ、さまざまな生産様式を編成してきたわけである。このような意味において、素材たる労働には、互いに連結し合い社会的労働を編成する歴史普遍的な連結力が備わっているということができるだろう。

では、ここで改めて最初の問いを繰り返すことにしよう。なぜ、要素は連結するのかと。その

答えは、歴史普遍的な連結力と、特殊歴史的な連結力とを統一して理解することから与えられると考える。すなわち、本来歴史普遍的な連結力を秘めた素材が、ある特殊な歴史的諸条件のもとに置かれて互いに分離されることによって、要素へと変化し、歴史普遍的な連結力がその特殊歴史的な連結力へ転化するわけである。ここでも労働を例に考えてみよう。

まず第一に、労働一般と商品を生産する私的労働の関係について。

すべての人間労働は、抽象的人間労働という側面と具体的有用労働という側面をもっており、両者の統一物をなしている。

「すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間の労働力の支出であって、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性においてそれは商品価値を形成するのである。すべての労働は、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間の労働力の支出であって、この具体的有用労働という属性においてそれは使用価値を生産するのである。」（マルクス [1867] s. 61, 63 ページ）

商品生産社会においては、労働の社会的な連関、言い換えれば、労働が社会的な労働であるという事実を、抽象的人間労働によって媒介させる。

なぜなら、諸労働は、さまざまな具体的有用労働という側面において直接に計画的に結び付けられていないから、その社会的な連関は、市場における商品交換の結果として後追的に確認されなければならないからである。共同体のなかでは、あの労働とこの労働は具体的にその有用性において異なった労働であるということと直接結び付けられ、配分され、組織される。ところが商品生産社会では、あの労働とこの労働は結局 1 時間の労働としては同等だから交換可能であるということと市場を通じて間接的に結び付けられているわけである。

このように、労働はそもそも社会的労働として歴史普遍的に連結すべきものではあっても、「互いに独立に営まれながらしかも社会的分業の自然発生的な諸環として全面的に互いに依存しあう私的諸労働」（マルクス [1867] s. 89, 101 ページ）として、商品生産社会の特殊歴史的条件のもとに分離されることによって要素（私的労働）に転化され、特殊歴史的な連結力を発揮することになるわけである¹⁾。

第二に再び、労働一般と賃労働について。

労働は、より高い生産力を獲得すべく人類史全体を通じてつねに連結を繰り返し、より高度な連結の形態を求め続ける。この絶え間ない人間労働の発展史は、資本主義の成立とともに、協業の広範な発展という形で結実する。かつてインドの共同体農業や、古代の金鉱山、近代のプランテーション農業などで例外的にみられた協業が、資本主

義のもとでは、生産様式を固有に特徴づけるものとして登場する。この結果、労働は、人類の歴史上画期的な高度の社会的生産力を発揮することができるようになる。

「個々別々のいくつもの労働日の総計と、それと同じ大きさの一つの結合労働日とを比べれば、後者はより大量の使用価値を生産し、したがって一定の有用効果の生産のために必要な労働時間を減少させる。与えられた場合に結合労働日がこの高められた生産力を受け取るのは、それが労働の機械的潜勢力を高めるからであろうと、労働の空間的作用範囲を拡大するからであろうと、生産規模に比べて空間的生産場面を狭めるからであろうと、決定的な瞬間に多くの労働をわずかな時間に流動させるからであろうと、個々人の競争心を刺激して活力を緊張させるからであろうと、多くの人々の同種の作業に連続性と多面性を押印するからであろうと、いろいろな作業を同時に行なうからであろうと、生産手段を共同使用によって節約するからであろうと、個々人の労働に社会的平均労働の性格を与えるからであろうと、どんな事情のもとでも、結合労働日の独自の生産力は、労働の社会的生産力または社会的労働の生産力なのである。この生産力は協業そのものから生ずる。他人との計画的な協働のなかでは、労働者は彼の個体的な限界を脱け出て彼の種属能力を発揮するのである。」(マルクス [1867] s. 348 - 9, 432 ページ)

しかし、このような労働の社会的生産力、または社会的労働の生産力の発揮は、労働そのものに内在的な歴史普遍的な連結力に基づけられてはいるものの、資本主義に特有の歴史的諸条件のもとではじめて実現されるものである。

「およそ労働者はいっしょにいなければ直接に協働することはできないし、したがって彼らが一定の場所に集まっていることが彼らの協業の条件だとすれば、賃金労働者は、同じ資本、同じ資本家が彼らを同時に充用しなければ、つまり彼らの労働力を同時に買わなければ、協業することはできない。それゆえ、これらの労働力そのものが生産過程で結合される前に、これらの労働力の総価値、すなわち一日分とか一週間分とかの労働者たちの賃金総額が、資本家のポケットの中にひとまとめにされていなければならない。」(傍点筆者)(マルクス [1867] s. 349, 433 ページ)

すなわち、資本主義においては、労働が社会的生産力を発揮するために結合すること

が、労働力の価値に対する賃金の支払によってのみ媒介されるという歴史的諸条件が成立している。このような条件のもとにおいてのみ、労働の社会的生産力が資本の生産力となって剰余価値を生み出し、賃労働者が搾取される。

「それだからこそ、労働者が社会的労働者として発揮する生産力は資本の生産力なのである。労働の社会的生産力は、労働者が一定の諸条件のもとにおかれさえすれば無償で発揮されるのであり、そして資本は彼らをこのような諸条件のもとにおくのである。労働の社会的生産力は資本にとってはなんの費用もかからないのだから、また他方この生産力は労働者の労働そのものが資本のものになるまでは労働者によって発揮されないのだから、この生産力は、資本が生来もっている生産力として、資本の内在的な生産力として、現われるのである。」（傍点筆者）
（マルクス [1867] s. 353, 437 ページ）

では、なぜ「賃金労働者は、同じ資本、同じ資本家が彼らを同時に充用しなければ、つまり彼らの労働力を同時に買わなければ、協業することはできない」のだろうか。あるいは、なぜ「この生産力は労働者の労働そのものが資本のものになるまでは労働者によって発揮されない」のだろうか。その理由は、賃金労働者が二重の意味で「自由な労働者」であるからである。

すなわち、封建制度の崩壊によって、封建的な人身的束縛関係から解放され、自由に自分自身の労働力を市場で資本家に販売することができるということが第一の意味である。しかし、このことは同時に、封建制末期の本源的蓄積過程を通じて生産手段から「解放」され、生活のためには自分の労働力以外何物も売るべきものをもたないというのが第二の意味である。

ただし、このことは歴史上一度きりの事件で終わったわけではけっしてない。資本主義的蓄積過程は、各生産期間の終わりに再び裸一貫の労働者を路傍に投げ出すことによって、この第二の意味における賃労働者を再生産している。つまり、封建制末期に土地から放擲された貧民が生産手段を集団で所有して共同組合を作るような諸条件が、まず最初は歴史的に否定され、さらに今度は資本主義が続くかぎりその内的メカニズムによって永遠に否定され続けることによって、労働者はつねに賃労働者でなければならない必然性が確立される。

以上、わたしたちは、具体的に労働を取り上げながら素材と要素の関係について論じてきた。商品生産は労働を私的労働に変え、資本主義は労働を賃労働に変える。こうして、歴史普遍的

な連結力を備えた素材に歴史的規定が与えられて要素となり、特殊歴史的な連結力が生成するわけである。

素材が要素となる諸条件が最初は外的に、そしてついには内的に生み出されるメカニズムを明らかにすることが、事物の生成の謎を解き明かす鍵となる。またこのことは同時に、事物衰退の秘密を解く鍵が、この諸条件の内的否定にあるということもわたしたちに教えているのである。

7. 矛盾

事物に孕まれる矛盾について検討しておこう。矛盾という概念は、言うまでもなく弁証法においてもっとも基本的なカテゴリーの一つである。すでに繰り返し述べてきたように、事物はつねに変化と運動のなかにあるが、この変化と運動の原動力となっているのが矛盾である。しかし、たんにこのように断言するだけでは、事物に孕まれる矛盾について何も明らかにしたことになる。なぜ、どのようにして事物に矛盾が孕まれるのだろうか。そして、矛盾はどのようにして事物の変化と運動の原動力となるのだろうか。これがわたしたちに与えられた課題である。

事物は、歴史的にも、またわたしたちの認識の上でも、まず要素から出発する。したがって、事物に矛盾が孕まれるとするなら、その矛盾は、すでにこの個別的な要素の中に孕まれていなければならない。要素は、歴史普遍的な素材がある特定の歴史的形態をとることによって成立する。したがって、この歴史的普遍性と歴史的的特殊性との重なりの中に、矛盾胚胎の秘密が隠されていることがわかる。

要素を構成する素材には、もともと歴史普遍的な連結力が備わっている。もしそうでないとすると、そのような素材を歴史的諸条件の力を借りていくら連結してみたところで、いずれ遅かれ早かれ解体してしまうと考えられるからである。したがって、要素と連関性のはたす歴史的役割は、このような素材のもつ普遍的な連結力を歴史的に実現することにある。つまり、事物の量的発展を、ある特殊な歴史的諸条件のもとで実現するわけである。このような役割に忠実であるかぎりにおいて、要素と連関性は、歴史的に積極的な意義をもつのであり、逆にこれを阻害しはじめるや否や、歴史に対する反動に転ずるわけである。

わたしたちが矛盾と呼ぶものは、素材が要素に変えられた瞬間に発生する。すなわち、素材のもつ普遍的連結力とそれが実現される歴史的形態とのあいだの矛盾がそれである。

素材はつねに要素という歴史的形態をとらなければならない。したがって、その普遍的連結力も、特殊歴史的連結力として現われるほかない。しかし、要素と連関性によって与えられる特殊歴史的形態は、つねにこの普遍的連結力の実現を促進するとは限

らない。いやそれどころか、連続的か断続的かにかかわらず、素材がつねに連結の衝動を秘めているのに対して、歴史的に与えられた形態というものは、事物の質を一定に確保するために、ある一定期間はつねに安定的、静止的でなければならない。量的変化とともに流動的に変化する「形態」というのは、そもそも形態ではありえない。ここに矛盾が発生する。そして、素材は特定の要素である必要はないが、少なくともいずれかの要素でなければならないから、そこにはつねに矛盾が発生する。

決定的な瞬間においては、事物の歴史普遍的な量的発展力が、歴史的な存在を転換する革命的な力に転化される。したがって矛盾は、つねに素材とその連関性の古い歴史的形態の破壊と、新たな歴史的形態の形成という形で決着をみるわけである。なぜなら、歴史普遍的な素材の連結力を打ち破ることはできないから。このようにして矛盾は、運動すなわち、事物の形態変化の原動力となる。

以上の分析は、わたしたちに次のことを強く示唆している。事物の歴史的形態は、その要素の量的発展を可能にし、そしてそれを実現していくのだが、この歴史的形態は同時に、量的発展に対してある決定的な限界を与えるものでもある。言い換えれば、この限界を越えた素材の量的発展、歴史普遍的結合力の実現を阻止する機構を備えているわけである。

事物は、事物そのものにとどまろうとするかぎり、このような限界を越えることができない。したがって、事物は、要素がこの限界を越えてさらに展開しようとするのを阻止するためにさまざまな制限を課することになる。たしかに、要素という特殊歴史的形態によってはじめて素材の量的発展の潜在力が実現されるのだが、この潜在力は、ある一定の限界のなかに押しとどめておかなければならないわけである。

つまり、事物の存在というものは、まさに一つの過程であって、要素の量的変化がありとあらゆる敵対的な制限にぶつかりつつ、それらを一一つ飽くことなく取り除きながら、最後にどうしても乗り越えることのできない限界（量的発展の上限値）に達する一つの過程なのである。

8．三つの連関性 一様性，多様性，統一性

わたしたちはこれまで、事物の表象をもっとも一般的に要素と連関性という二つのモメントから成り立っているものととらえ、そのなかから弁証法の基本定式を展開してきた。本節の最後にあたって、わたしたちがさらに考察を進めようとしているのは、この連関性の具体的な内容についてである。

要素はうまく析出できたものの、この要素が互いに結合して生み出す連関性を、さてどのように理解したらいいものか。このような、わたしたち研究者が日々遭遇する切実な悩みを解く手掛かりを与えようというわけである。あらかじめ結論を先取りしておけば、個

別的な事物のもつ連関性は、「一様性」「多様性」「統一性」の三つに整理して理解することができる。では、分析を開始しよう。

いまわたしたちが目の前にすえて考察の対象にしている事物は、正確にいえば、個別的な事物である。あるいは、これを**個体**と呼んでもよからう。

現実の事物は、いくつもの個体が互いにゆるやかに結び付きながら存在している。たとえば、サバンナに棲息する幾組ものライオンの家族がそうであり、世界市場を構成する各国経済がそうである。このような全個体の全体状況を考察することは、まだわたしたちの課題となっていない。とりあえず、たった一つの個別的な事物だけが取り出され、その内部の要素と連関性が分析の俎上に乗せられている。

ところで、事物は、あたかも「真空状態」のなかにいるような具合にぼつねんと存在しているわけではけっしてない。かならずそれを取り囲む外的環境とともに存在している。そして、この外的環境とのあいだで、さまざまな相互作用を及ぼしあっている。**外的環境**によって事物の存在が保証され、条件づけられていると同時に、事物の存在と運動が外的環境に反作用を及ぼしているわけである。

個別的な事物と外的環境のあいだの関係は、まず、事物を構成するそれぞれの要素と外的環境のあいだの関係として現われる。一つ一つの要素が対面している外的環境はそれぞれ異なっている。そして、そのような外的環境の違いに応じて、一つ一つの要素に多様な性格が生じることになる。わたしたちは、このようにして生じた要素の性格を**多様性**と呼ぶことにしよう。

たとえば、農業における個別経営体ごとの生産性の違いがそうである。個別経営体が耕作する土地の豊度に応じて、たとえ同じ生産手段を用い、同じだけの労働時間を費やしたとしても、それぞれの個別経営体は異なる収穫をあげることになる。人間労働によって制御することのできない自然環境が、個別経営体の成績を大きく左右している。そして、一定水準の生産性ごとにいくつもの個別経営体がグループ化され、それらが一団となって階層構造を形作ることになる。この構造が差額地代の基礎となっていることは、言うまでもない。

あるいは、国民の嗜好の違いに合わせて、個別経営体が生産する品目に国ごとの区別が生じ、これが各国の産業構造の違いとなって現われるのも、この多様性の一例である。個別経営体のもつ技術水準の高低や、産業発達の歴史的な特殊性によって国民の嗜好そのものが変化を受けるという反作用の影響を考慮してもなお、自然環境に規定された国民の多様な嗜好が、さまざまな個別経営体や産業諸部門を生じさせる上で、やはり決定的な影響を及ぼしていると言えるだろう。

しかし逆に、要素が要素であるかぎり、外的環境との相互作用にもとづく多様性を貫いて、

要素としての一様な性格を示していることもまた事実である。そのような一様性を示すのでないかぎり、わたしたちは、それを事物の「要素」と一括して呼ぶことはそもそもできないのである。

たとえば、対面する自然環境の影響によってどれだけ耕作方法に差異が生まれ、収穫量が異なるうとも、すべての個別農業経営体は、やはり同じ生産様式のもとにおける個別農業経営体であることに違いはない。

また、国民性の違いや、気候の寒暖の違いによってどれだけ各国ごとに個別経営体の生產品目が異なり、したがってまたこれをグループ化した繊維産業、食品産業、建築産業等々の内容と構成比率が異なっていたとしても、人間の基本的な衣食住の需要を満たすという一点においては、これらはみな等しく個別工業経営体であり、「産業部門」と呼ばれるわけである。

このように、事物は、それ自体に内在的な一様性と、外的環境に依存的であるという意味で、外在的な多様性とを合わせもった要素によって構成されているということが出来る。より正確には、個別的事物（個体）は、一様性を前提とした多様な様式で存在する要素によって構成されているわけである。したがって、そのような要素の連関性を、そのものとして内在的に観察すれば一様性として現われ、外的環境との相互関係のもとに外在的に観察すれば多様性として現われることになる。

以上から、まずわたしたちは、事物を取り囲む外的環境を実験的に一定に維持するか、あるいは「思考実験室」の中でこれを一定と想定することで、外的環境の影響がすべての要素に等しく作用するものと前提し、要素と要素のあいだの内的な連関性、すなわち一様性を取り扱うことにしよう。

たしかに、現実の外的環境は、けっして一定ではない。しかし、事物そのものに内在的で必然的な「事物とは、そもそも何なのか」を明らかにするには、このような認識上の手続きを最初にふまえておかなければならない。そして、この手続きをふまえることによって始めて、「事物は、そもそもいかにして異なりうるか」という次なる問いを発することが可能になる。

事物の表象は、まず次のように定式化することができる。

事物の表象 = [内的連関性（一様性） 要素]

事物を構成する根本的な構成単位をなすものとして、要素は、すべて一様な性格をもつものでなければならない。もしそうでないとするなら、事物のそれぞれの個体は、多様な性質をもった要素の組み合わせに応じてまったく異なった性質をもつものとなり、同じ事物

の個体同士とは言うことができなくなってしまう。したがって、このような事物の一樣性は、本来的に多様な性質をもった種々の要素が組み合わされることで次第に顕在化し、一つの实体に体现され、ついには諸個体を貫く一樣性となって現われでてくるわけである。弁証法の基本定式にしたがって、このような一樣性にかかわる事物の三つの基本的な存在形態は、次のように定式化できると考えられる。

個別的形態 = [個別的要素 潜在的一樣性]
特殊の形態 = [顕在化する特殊的一樣性 展開する諸要素]
一般の形態 = [{ 顕在化した一般的一樣性 個別的要素 }
 { 展開した諸要素 潜在的一樣性 }]
 = [一樣性を体现した一般的要素 多様な諸要素]

事物が事物そのものとして存在するためには、要素の量的発展もさることながら、まず何よりも要素を「ほかの誰のものでもない自分自身の要素」として確保し、維持していかねなければならない。このことが、諸要素を貫く一樣性として最終的に一般的要素によって統一的に体现されていくまでの基本形態を示したものが、上の三形態である。この一樣性が、のちに事物の統一性を実現していく際の基盤、あるいはその前提となるものである。こんどは、事物の要素がもつ多様性の側面を分析し、定式化していくことにしよう。すべての要素に共通する一樣性の分析を前提としたうえで、こんどは要素と外的環境との相互作用を観察するわけである。このような要素の連結から生まれる連関性を「外的連関性」と呼ぶならば、事物の表象は、改めて次のように定式化することができる。

事物の表象 = [外的連関性 (多様性) 要素]

これによって示される内容は、要素がその連結によって、一樣性とはまったく異なる、より正確にはその対立物である多様性を事物のなかに生み出すということである。ここから、多様性の側面に注目して観察された事物の三つの基本的な存在形態は、次のように定式化できると考えられる。

個別的形態 = [個別的要素 潜在的多様性]
特殊の形態 = [顕在化する特殊的多様性 展開する諸要素]
一般の形態 = [{ 顕在化した一般的多様性 個別的要素 }
 { 展開した諸要素 潜在的多様性 }]

= [多様性を体現した一般的要素 一様な諸要素]

事物の存在形態が多様性を身に付けている理由は、たんに各要素が外的環境とのあいだで相互作用を及ぼしあっているからというだけにとどまらない。むしろ事物は、多様性を身に付けることによって、要素の最大限の量的発展を実現するために不可欠の条件の獲得に成功していることを忘れてはならない。

もし、事物の要素がたんに一様な性質だけを身に付けているとしたら、さまざまに異なり、そしてさまざまに変化する外的環境に最適に対応して、空間のすみずみにまで要素を行き渡らせ、事物を最大限拡張させていくことはとうてい不可能であるに違いない。だから、要素がたんに一様性を身に付けているだけでなく、外的環境に適切に対応した多様性も同時に身に付けていることによって、量的発展が最大限の効果を発揮することになる。そして、このような要素の環境への適応と多様化を取り仕切ることが、「多様性を体現した一般的要素」の役割である。

たとえば、近代的土地所有制度が成立した結果誕生した「土地資本」は、このような一般的要素の一つの典型例であるということが出来る。土地の豊度や市場からの距離の違いに応じて階段状の格差構造をもつ地代の体系が成立することによってはじめて、当該地域で生産されるすべての商品が等しい市場価値をもって市場に登場する。いわば、土地生産性の多様性を折り込みながら、「一物一価の法則」という一様性が貫かれるわけである。こうして、その地域のすみずみまで当該の農業生産物が行き渡ることが可能になる。このような地代という形態をとった個別経営体の多様性を一身に担い、体現し、そして独自の運動を展開していくものが土地資本である。具体的には、地代を一般的な利子率で資本還元することによって、その価値額を求めることができる。

以上、わたしたちは、事物のもつ一様性と多様性のそれぞれについて定式化を行ってきた。しかし、現実の事物は、言うまでもなく両者の不可分の統一物として存在しており、そのような現実の事物のもつ両側面がそれぞれ独立してわたしたちの認識に反映して形成されたものが、上記の二組の定式であるということが出来る。

つまり、現実の事物の存在形態は、一様性と多様性の統一物である。このことを言い換えれば、事物とは、要素間の内的な連関性と、要素と外的環境とのあいだの外的連関性の統一物である。このような一様性と多様性の統一物としての事物の表象は、次のような定式によって表現することができると考えられる。

事物の表象 = [内的かつ外的連関性（統一性） 一様かつ多様な要素]

要素の一樣性を維持しつつ、その多様性を駆使して最大限の量的拡大を成し遂げるためには、全要素の統一的な連結とコントロールを実現しなければならない。そして、このことを可能にするための特別の一般的要素を析出しなければならない。この過程を通じて、要素のもつ一樣性と多様性が個体の統一性と個性に転化していくことになる。

個別的形態 = [個別的要素 潜在的統一性]
 = [一樣かつ多様な個別的要素 個別性]
特殊の形態 = [顕在化する特殊の統一性 展開する諸要素]
 = [特殊性 展開する一樣かつ多様な諸要素]
一般的形態 = [{ 顕在化した一般的統一性 個別的要素 }
 { 展開した諸要素 潜在的統一性 }]
 = [{ 一般性 個別的要素 } { 展開した諸要素 個別性 }]
 = [統一性を体現した一般的要素 一樣かつ多様な (個別的な) 諸要素]

個別的物事 (個体) の統一性を実現する鍵を握っている「統一性を体現した一般的要素」には、多かれ少なかれ何らかの意識性が備わっていなければならない。

言い換えれば、個体の統一性は意識性に裏打ちされていなければならない。この点が、のちに論じられる諸個体の総体である物事総体との違いである。諸個体は、意識的統一性によってではなく、無意識的な均衡性と相互淘汰によって特徴づけられる。

たとえば、人体という個体にとって「統一性を体現した一般的要素」とは脳髄であるし、資本主義的生産様式にとってそれは、各国資本主義に成立する資本制的階級関係である。

注

- 1) マルクスは同時に、島上のロビンソン、ヨーロッパ中世、家長制的共同体、社会主義社会を商品生産社会と比較しつつ、このことをさらに詳細に論じている。マルクス [1867] ss. 90 - 94, 102 - 106 ページ参照。

参考文献

第14巻4号 (2002年3月) に掲載の参考文献を参照

Formulation of Dialectics as Social Science Methodology: Representations, Forms of Existence and the Essence (3) (Concluded)

Part 5 'Essence' analyzes the representations of concept. It presents the basic formula of dialectics between the essence and phenomena with its individual, particular and general forms of existence, and identifies the essence of the thing with the general form of existence.

Part 6 'The birth of a thing: transformation from materials to elements' elucidates why and how elements have the power to combine each other and construct a thing in the historical context. The historical power of elements stems from the trans-historical power of materials to combine each other, although the latter lacks the necessity of constructing the thing.

Part 7 'Contradiction' examines the fact that a thing inevitably contains contradiction within itself because historically universal materials of the thing should take a historically specific form as elements in order to exist, and thus, the trans-historical power of materials to limitlessly combine and increase in number necessarily clashes against the historical limit caused by the form.

Part 8 'The three types of relationship: uniformity, diversity and unity' classifies relationship among elements into the three types; the thing is the unity of uniformity which is intrinsic in elements and diversity which comes from the interaction between elements and their external environments.

(ITAKI, Masahiko 本学部教授)